

事業活動実績報告書

施設名	幼保連携型認定こども園葛飾みどり
教育理念	自ら生きる とともに育ちあう
1 事業名	心と体をつなぐ
2 実施期間	令和 7年 4月 1日 ～ 令和 8年 3月31日

3	取組概要	(取組日) 令和7年4月1日 ～ 令和7年5月31日	
		(実施内容) 当該期間における取組内容を詳細に記載すること リズムカルな動きを楽しみ、からだ全体を動かす運動に進んでとりこんでいく。その運動あそびの中で『並ぶ』などの動作を入れ、「順番」を意識しながら楽しめるようにする。 クワガタ鬼、へび追いかけ、色鬼、ボール爆弾	
		(取組日) 令和7年6月1日 ～ 令和7年7月31日	
		(実施内容) 当該期間における取組内容を詳細に記載すること 一人が楽しむことから、今度は友だちの存在を意識していけるような種目を取り入れる。並ぶことに加えて、移動するといった『社会性の素地』となる行動へも好奇心を持っていく。 トンカチ鬼、カイカイ鬼、ボール送りなど	
		(取組日) 令和7年8月1日 ～ 令和7年10月31日	
		(実施内容) 当該期間における取組内容を詳細に記載すること 自分の身体の動きを自分でコントロールして、回転感覚や空間感覚を伴う動作を楽しむ。自らチャレンジしていく姿勢を培っていく。 マット怪獣、渡り鳥、島鬼など	
		(取組日) 令和7年11月1日 ～ 令和7年12月26日	
		(実施内容) 当該期間における取組内容を詳細に記載すること 『距離・方向』といった『空間感覚』を味わっていく。運動欲求を充分満たして、動く喜びを体験していく。 くすぐり鬼、紅白玉入れ、爆弾避け、座り鬼など	

3	取組概要	(取組日) 令和8年1月5日 ～ 令和8年3月31日	
		(実施内容) 当該期間における取組内容を詳細に記載すること これまでの取り組みから、ルールある集団ゲームなどを取り入れ、これまで培ってきたことを子ども自身で感じる機会を作る。 ドッチボール、玉入れ、大縄、綱引きなど	
	(取組日) 令和 年 月 日 ～ 令和 年 月 日		
	(実施内容) 当該期間における取組内容を詳細に記載すること	写真添付 (区HPで公開が可能な写真を添付してください) 活動内容が分かるもの 取組に関するもの	
	(取組日) 令和 年 月 日 ～ 令和 年 月 日		
	(実施内容) 当該期間における取組内容を詳細に記載すること	写真添付 (区HPで公開が可能な写真を添付してください) 活動内容が分かるもの 取組に関するもの	
	(取組日) 令和 年 月 日 ～ 令和 年 月 日		
	(実施内容) 当該期間における取組内容を詳細に記載すること	写真添付 (区HPで公開が可能な写真を添付してください) 活動内容が分かるもの 取組に関するもの	
	(取組日) 令和 年 月 日 ～ 令和 年 月 日		
	(実施内容) 当該期間における取組内容を詳細に記載すること	写真添付 (区HPで公開が可能な写真を添付してください) 活動内容が分かるもの 取組に関するもの	

効果検証報告書（継続事業用）

施設名	幼保連携型認定こども園葛飾みどり
教育理念	自ら生きる とともに育ちあう

計画時

事業の区分(5領域)		幼稚園教育要領に示された5領域に該当するもの(複数可。最も当てはまるものには◎を選択してください)									
		健康	○	人間関係	○	環境		言葉	○	表現	◎
1 事業名		心と体をつなぐ									
2 事業概要		心と体の健康は、相互に密接な関連があるとされる。将来的に健康で安全な生活をするためには、保育者の愛情の下で、心と体を十分に働かせて生活することが必要である。また、園児の発育状態を的確に把握することで、心と体の状態に即して保育者が適切な関りや配慮ができる。適切な関りや配慮のための方法の一つとして、身体機能の発達を促す取り組みが必要とされる。									
3 対象学級(クラス名) 対象人数		花組、雪組、星組							95 名		
4 実施体制		取組に必要な環境(人員、事業の遂行に必要な技能やノウハウ等)の保有状況									
		好奇心は脳を活性化させる、ということをベースに脳と知的好奇心との関係を脳科学の視点からひもといて体操を提供できる体育専門員。									
事業後	4についての効果・検証	事業実績から推測される効果や改善点等									
		『集団』ではなく、それぞれの能力を知るために、個々の持つ今の運動能力を、あそびの中で測定(長座体前屈・垂直飛び・ジグザク走・片足バランス・握力)したことで、子ども自身が自分の身体に興味を持ち、最終的にどの子どもも身体全身を使って動かすことを楽しんだ。体操を楽しみながら全身の動きを体験することで、自分の体に興味関心を持ち、様々な種目に自分の意志で挑戦していた。また、興味関心を持つ自分のことを自分で認める心が育っていったのではないと思われる。									
5 事業のねらい		健康な心を育むため、自ら体を十分に動かそうとする意欲や、自分から進んで運動しようとする気持ちを育て、身体諸機能の調和的な発達を進めていく。									
事業後	5についての効果・検証	事業実績から推測される効果や改善点等									
		一定の動きを習得させようという目的ではなく、子ども自身の心で身体を動かすことをしてきたことで、子ども自身も出来た出来ないを意識せずに身体が作られていった。その子それぞれの持つ身体力で思う存分種目に参加できていた。からだの柔軟性が昨年度より衰えているため、カリキュラムを見直す。									

6 取組の内容

計画スケジュールを含む詳細な取組内容、経験させたい内容等

4月
年少:まずは『運動って楽しい』と思う事を中心に、まねっこあそび・早起きごっこなど、生活の身近なもので体を使いつつ、基本的な動作を経験していく。
年中:体を動かす面白さを味わいながら、くぐったり飛んだりすることを『やってみよう!』と思える雰囲気の中で経験していく。
年長:自分の身体各部を自ら動かせる喜びを味わい、動物になりきったり、虫になりきったりして、期待をもって経験していく。

5月
年少:友達の存在も感じながら、並ぶ、移動するなど、社会性の素地となる行動も、好奇心を持って経験していく。
年中:徒手運動など、子どもたちの興味を引き出し、自分から楽しんでやってみようとする
年長:長縄や、鉄棒など、回転感覚や空間感覚を取り入れ、身体で感じることを楽しむ。

6月
年少:友達とリズムカルな動きを楽しみ、身体全体を動かす運動に進んで取り組む。技術的成就に関わらず、運動感覚を十分に味わえるようにする。
年中:ぶら下がり、豚の丸焼きなどを表現しながら空間感覚を取り入れていく。
年長:ドッチボールなどの簡単なチームゲームを取り入れ、友達と運動する楽しさ、大切さを知る。

7月
年少:跳び箱を用いて山登りをイメージしたり、動物になりきってジャンプしたりしながら全身を使った活動を取り入れていく。
年中:横に転がったり、前に転がったりして、様々な動きの面白さをあじわう
年長:なべなべそこぬけ、や手つなぎジャンケンなど、仲間同士の関りから積極性を養ったり、気持ちの共感したりしていく

9月
年少:ボールの基本的な扱いに触れて、距離や方向といった空間感覚の経験をする。
年中:集まりっこ、ボール入れなど、仲間といっしょに動く喜びを感じる。
年長:大縄や、大波飛びなど、タイミング感覚を経験する。

10月
年少:引っ張りっこや分解ロボットなど、自分でコントロールしていく楽しさを体験する。
年中:ぶら下がりや、豚の丸焼きなど、空中感覚を楽しむ。
年長:足たたき飛びや、大根抜きなどを取り入れ、自主的に楽しんで取り組めるようにする。

11月
年少:平均台を使って、立つしゃがむ、カニ歩きなど自分の身体や手足が自分の意思通りに動く喜びを味わう。
年中:豚の丸焼きからのタッチ、カニ歩きからの変化走など、自分で出来るかどうかの可能性を自分で試していけるようにする。
年長:チームゲームを取り入れて、ルールのある遊びを楽しみながら体験することで、社会性を養う。

12月
年少:両足飛びやヒコーキなどから、自分の体の動きを自分でコントロールしていく
年中:バランス飛びや、波飛びなど、自分で自分の身体をコントロールしていく。
年長:ロケット、キック、プレスキックなど、運動動作のコントロールを自分の意思で自由に使い分けていく。

1月
年少:ヘリコプターや手つなぎスキップなど、自分の思い通りに動いていける快さを感じていく。
年中:ケンパ、ボール追いかけなど、自分の体のタイミングを自分で知って動かしていく
年長:コーヒーカップや二人組蛙飛びなど、仲間に興味や関心を持ちつつ、集中力や注意力を体で知っていく

2月
年少:なわ運動をととして、上肢や下肢を、布玉運動を通して視覚とつかみ取る動きなど、協応性を引き出す
年中:長縄で蛇飛び、デコボコマットなどを取り入れ、各動きを思いっきり行う喜びを味わう
年長:チームゲームを取り入れ、自分が必要とされること、また役割の大切さに気づいていく

3月
年少:すもうごっこなどを通し、なかまと一緒に身体を動かすことを味わう
年中:チームに分かれて簡単なゲームを行い、運動の楽しさを仲間と一緒に味わう
年長:リレーや、ドッチボールなど、自分自身の役割や必要性を感じながらチームプレーを楽しむ

上記のうち、幼稚園教育要領に示された「内容」について、各園で積み重ねてきた取組を発展させた点

体操の枠組みだけで身体を動かすことをするのではなく、体操のカリキュラムをもとにして日常の中で十分に体を動かすことが出来るあそびを提供。大縄、なわとび、氷鬼などに発展していった。
各学年の成長段階に応じて、その時期に最適なカリキュラムを組み、個々の運動能力を遊びの中から自分の身体の使い方を習得してきた。

(継続事業のみ記入)前年度の取組から発展させた点

大縄やなわとびを、保育者も子どもと一緒に夢中になって取り組んだ。大人も夢中になるため、子どもたちは夢中になる大人の姿を見て、自分たちも楽しいことをとことんやっていた、と感じていた。大人が『やってみよう』『これは楽しいよ』と教えて学ぶのではなく、大人が夢中になって体を使う姿を見ることが大事だと気が付いた。子どものアイデアから、何回飛んだか数を数えて、自分の成長の記録として残していった。数の認識も増ったように感じる。

6についての
効果・検証

事業実績から推測される効果や改善点等

くぐったり飛んだりする際には、その「動き方」を評価するのではなく、たとえばぶら下がる際には動物になりきって参加するため、腕の力に焦点を当て、力があるかないかではなくその動物として参加できるため、全身が活発化された。並んでいる子からもやっている子が見えるようにして、自分の番への見通しや、どんなふうに行っているのか見えるように並ぶことで活動の予測が出来た。

計画時	7 環境構成例	例：鉄棒、ぶら下がり、ブタの丸やき
	事業後 7についての 効果・検証	事業実績から推測される効果や改善点等 体操に限らずあそびのなかでも自分から十分に身体を動かすことに気持ちよさや、快さを感じてすごしていた。健康な心、というところではいきいきと発言したり、自分から率先して片付けをしたりして、充実感を味わった。 体操を楽しみながら、出来たか出来なかったかの自分ではなく、そのことに自ら喜んで参加してきたため自分自身を自分で認められ、体操以外の生活でも自信をもって暮らしている。
計画時	8 期待される効果 児童の姿	取組を通じて期待される児童の姿や効果等 園児の興味やそれぞれの能力などに応じた体操遊びを展開する中で、自分から十分に身体を動かすことに気持ちよさや、快さを感じている。 『集団』ではなく、それぞれの能力を知るために、個々の持つ今の運動能力を、あそびの中で測定(長座体前屈・垂直飛び・ジグザク走・片足バランス・握力)し、最終的にどの子ども身体全身を使って動く。 健康な心と体は一体というところでも、全身を使う事を様々な種目から習得しながら、自分自身の存在や充実感を味わって日常生活を送ることが出来る。 体操を楽しみながら全身の動きを体験することで、自分の体に興味関心を持ち、興味関心を持つ自分を大切にすることが育ち、自分というものを大切にできる大人になっていくことを期待する。
	事業後 8についての 効果・検証	事業実績から推測される効果や改善点等 何かになり切って参加することは、自然に全身を使うことにつながっていくが、今の子どもたちであれば腕や足などに注目できる運動遊びもあっていいのではないかと感じる。
	9 効果検証総括	事業を通しての感想、今後の教育・保育に向けて 体操は、できたかできなかったか、上手か下手かで評価しがちで、だからこそ苦手意識を持ってしまう子が多いと感じる。その苦手意識は大人が招いていると確信しているため、体操ではその子のやっている姿もやっていない姿も、そのままの姿を参加の姿として受け止めてやってきた。また、腕を鍛える目的や、足を強くする目的ではなく、何かになりきることで自ずと全身を使って表現することをしてきたため、いつの間にか手足が丈夫になっていった。

※必要に応じて、別紙の添付やイラストの活用などにより事業説明を補足しても構いません(別紙は任意様式)。

※幼保連携型認定こども園教育・保育要領における教育のねらいや内容等については、幼稚園教育要領の5領域から構成されていることを踏まえ、本事業では「幼稚園教育要領」とのみ記載しています。